

海の命 ① 一の場面

一、父はどんな漁師だったのだろう。分かる言葉や文を書き出し、思ったことや考えたことを書こう。

どんな漁師だったか分かることばや文

思ったこと・考えたこと

・もぐり漁師

・だれにももぐれない瀬に。たった独りでもぐっては、

・ニメートルもある大物をしとめても、父は自まんすることもなく

・「海のめぐみだからなあ。」

・不漁の日が十日続いても、父は何も変わらなかった。

深めるための発問の例

◎ 子どもが長い文を取り出してきた場合、その文の内、特に「中心となる言葉」はどれか問う。さらに、「なぜその言葉なのか」理由を尋ねる。同時に特定の子の課題とせず、全員の課題とすることが大切。

T C T

「中心となる言葉は？」

「だれにももぐれない瀬」（他を指摘する子も）

「だれにももぐれない瀬ってどんな瀬？」

← 普通の人がもぐったのでは、命を失うような危険な場所

◎ 副詞や副詞句など動詞を修飾する言葉に注目させ、その意味を考えさせる。

① このような場合、これらの修飾語がある場合とない場合でイメージがどう違うか比べさせるのが効果的。

② あるいは、他の言葉（同意語的な）と置き換えて、イメージの違いを比べてみると、言葉の意味が分かりやすい。だれにももぐれない瀬に、独りでもぐっては、だれにももぐれない瀬に、

たった独りでもぐっては、

「ある場合とない場合でイメージはどうちがいますか？」

一人

独り
「二つの言い方を比べるとイメージはどう違いますか。」

C C T
「あなたなら、こんな場合どうしますか？」

「じまんする。」

……

T
「海のめぐみってどんな意味ですか？」

T
海が与えてくれためぐみ
人間の力ではどうすることもできないこと

T
「不漁の日が十日続いても、なぜ父は何も変わらなかったのでしょうか？」

T
「あなたなら、こんな場合どうしますか？
あるいは何かいいですか？」

魚がとれることを海が与えてくれるめぐみと考えている父は、海のめぐみがあるまでじつと待っている。不平を言わない。

その理由

二、ま

二、与吉じいさはどんな漁師だったのだろうか。分かる言葉や文を書き出し、思ったことや考

深めるための発問の例

どんな漁師だったか分かる文

・太一の父が死んだ瀬に、毎日一本づりに行っている漁師だった。

・「わしも年じゃ。ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を海に自然に遊ばせてやりたくなっとる。」

・太一は、なかなかつり糸をにぎらせてもらえなかった。

・「千びきに一びきでいいんだ。千びきいるうちに一びきをつれば、ずっとこの海で生きていけるよ。」

・与吉じいさは、毎日タイを二十ぴきとると、もう道具をかたづけた。

その理由

・大事な語句と同じ場面内の他の語句と関連付ける

(場面の中の中心的な語句を関連づけることによって、場面のイメージを広めたり深めたりすることができると)

T 与吉じいさは、「千びきに一びき」と言っています。どんな思いを持っているのでしょうか？

C 魚を好き。守りたい。自然が好き等
T 「千びきに一びき」と同じような表現をこの場面で見つけましょう。

・魚を海に自然に遊ばしてやりたくなっとる。
・千びきいるうちに一びきをつれば、ずっとこの海で生きていける
・毎日タイを二十ぴきとると、もう道具をかたづけた。

T 太一はどうして与吉じいさのよしになったのでしょうか？

無理やりでしになった
← 太一の強い決意が分かる
← どうして？

父と与吉じいさの違い
← 与吉じいさ 一本づりの漁師
父 もぐり漁師

父と与吉じいさの共通点は？
← 漁の場所＝瀬
← …… (無理にはこだわらない)

一、太一は、与吉じいさからどんなことを受け取ったのでしよう。分かる言葉や文を書き出し、思ったことや考えたことを書こう。

(ヒント:釣りの技術でしょうか、釣りの心でしょうか)

与吉じいさから受け取ったことが分かる言葉や文

思ったこと・考えたこと

・「おまえは村一番の漁師だよ。太一ははお前の海だ。」

・「海に帰りましたか。与吉じいさ、心から感謝しております。おかげさまでほくも海で生きられます。」

・今の太一は自然な気持ちで顔の前に両手を合わせる事ができた。父がそうであったように、与吉じいさも海に帰っていったのだ。

深める発問の例

◎ 大事な語句と前の場面（語句）と関連付ける。

T 「村一番の漁師」ってどんな意味？

前の場面の与吉じいさの言葉から考えてみよう。

前の場面の与吉じいさの言葉を思い出させる

・もう魚を海に自然に遊ばせてやりたい
・千びきに「びき

村一番の漁師とは？

本物の漁師とは？

自然 海 魚 を大切に作る 共に生きる

T 「海で生きる」ってどんな意味

太一は、与吉じいさから何を学んだか？

前の場面の与吉じいさの言葉を思い出させる

「千びきに「びきでいいんだ。千びきいるうちに「びきをすれば、ずっとこの海で生きていけるよ。」

魚をとるだけでなく
魚のことを考える
海のことを考える

T 太一は、どうして「与吉じいさも海に帰った」と思ったのか？

← 父も与吉じいさも、魚を 海を 大好きだったから
二人ともずっと、海で暮らしてきたから

二、太一が与吉じいさから受け取ったことを一言で書きたり、また、その理由も書きましよう。

一、母の気持ちをかんがえてみよう。
分かる言葉や文を書き出し、思ったことや考えたことを書こう。

母の気持ち分かる言葉や文	<ul style="list-style-type: none"> ・「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言い出すかと思うと、…」 ・「…わたしはおそろしくて夜もねむられないよ。…」 ・「…おまえの心の中がみえるようで。」 ・母の悲しみ 	思ったこと・考えたこと	<p>深める発問の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 揭示文に線を入れる↓発表 (解釈の仕方・書き方の指導) (理由・根拠を書く) <p>T 母は何がおそろしくて、夜も眠られないのですか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 太一が父の死んだ瀬にもぐろうとしていること ・ 太一も父のようになるのではないか。 <p>(T 母はいつから気付いていたのか。)</p> <p>T 母の悲しみって何でしょう？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 父の死 ・ その後の生活？ ・ 太一が父の死んだ瀬にもぐろうとしていること
--------------	---	-------------	---

二、母にとっての海を一言で表してみよう。

理由も言わせる

三、太一が海に飛びこんだときの、海のイメージを一言で表し、根拠となる言葉や文を書き出しましょう。

「情景」
物語などで、登場人物の気持ちとひびきあい、一体のものとなった風景や様子。

海のイメージ	上の書き 深める発問の例
<p>(例)</p> <p>気持ちよい</p> <p>きれい</p> <p>そう大</p> <p>暗い</p> <p>こわい</p> <p>にくしみ</p> <p>(あなたの言葉)</p>	<p>C 海のイメージの一言発表 根拠となる文に線を入れる(揭示文)</p> <p>T 根拠となる文の特にどの言葉が、○○○○をよく表しているか？ そのわけは？</p> <p>根拠となりそうな文が他にないか？</p> <p>T 情景の指導</p> <p>太一の気持ちとひびき合っている</p> <p>← 海のマイナスのイメージがどうしてないのか？</p> <p>(深く追求しない。次時以降の課題)</p>

追い求めているうちに、百五十キロはゆうにこえているだろう。

一、五の場面の1を読んで、大きなクエの描写を読み取ろう。

クエのイメージ	上のように感じた文や言葉を全て書き出そう。
(例) きれい こわい ぶきみ 巨大 偉大(いだい) (あなたの言葉)	・青い宝石の目 ・ひとみは黒いしんじゅのようだった。 ・刃物のような歯が並んだ灰色のくちびるは、ふくらんでいて大きい。 ・魚がえらを動かすたび、水が動くのが分かった。 ・岩そのものが魚のようだった。 ・全体は見えないのだが、一五〇キロはゆうにこえているだろう。

深めるための発問の例

① 比喩表現に着目してクエのイメージを深める

「この場面では、クエを描写するのに『たとえの表現』が使われています。それを見つけてみましょう。また、『たとえの表現』を使うことによってクエのどのような様子が強調されていますか。」

- ・青い宝石の(ような)目 きれいな目
- ・ひとみは黒いしんじゅのようだった。
- ・刃物のような歯 鋭い、よく切れそうな歯
- ・岩そのものが魚のようだった。
- ・魚が岩(そのもの)のようだった。「と比べる。」

「何を 何に」例えているのか。
逆説的な表現の効果を考えさせる。

理由を書きましよう。

深めるための発問の例

② 色彩表現に着目させる

- ・青い宝石の(ような)目
- ・(銀色に)ゆれる水面)
- ・青い目
- ・ひとみは黒いしんじゅのようだった。
- ・灰色のくちびる

興奮していながらこの海の命だと思えた。

一、場面の最後の方に、「太一は瀬の主を殺さずに済んだのだ。」とありますが、この言葉にはどのような意味が含まれているのでしょうか。

以前は、（

）と思っていた。

しかし、

今は、（

）と知っている。

一、太一の気持ちの変化を読みとろう。

<p>太一の行動や思ったこと（本文）</p> <p>これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚</p> <p>村一番のもぐり漁師だった父を破った瀬の主なのかもしれない。</p> <p>太一は鼻づらに向かってもりをつきだす</p> <p>この大魚は自分に殺されたがっているのだと、太一は思ったほどだった。これまで数限りなく魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのは初めてだ。</p> <p>この大魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にならないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。</p> <p>水の中で太一はふつとほほえみ、口から銀のあぶくをだした。</p> <p>もりの刃先を足の方にどけ、クエに向かつてもう一度えがおを作った。</p> <p>「おとう、ここにおられたのですか。また会いにきますから。」</p> <p>大魚はこの海の命だと思えた。</p>												
<p>理由</p> <p>「二」には、A、B、Cの記号を書き入れましょう。 A…クエを殺さなければならぬという気持ち B…クエを殺すか、殺さないか迷っている。 C…クエを殺したくないという気持ち</p> <p>子どものものによって、A B Cの判定の結果が異なる場合も考えられるが、その子なりに理由付けができていれば無理に一つの判定に決める必要がない。</p>												

理由

「二」には、A、B、Cの記号を書き入れましょう。
A…クエを殺さなければならぬという気持ち
B…クエを殺すか、殺さないか迷っている。
C…クエを殺したくないという気持ち

海の命 ⑦ 六の場面

一、次の四つのことは、この作品全体でどのような意味を持つと思いますか。あなたの考えを書いてください。（書けるものだけでよい。）

① 太一がけっこんし、四人の子供を育てたこと。

親から子へと、命のつながりを感じさせられる。また、元気でやさしい子どもの姿に人間の命の在り方を考えさせられる。

② 母がおだやかで満ち足りた、美しいおばあさ（四の場面との対比）

夫を奪われた悲しみと、おそろくは生活を支えるために強いられた苦勞を乗り越え、今はおだやかで満ち足りた、美しいおばあさんになったことに命の輝きを感じさせる。

③ 太一が村一番の漁師であり続けたこと。

村一番の漁師とは、千びきに一びきしかとらない、海の命を守り続ける漁師である。

④ 巨大なクエにもりを打たなかったことを、生がいだれにも話さなかったこと。

「命を大切にすると、どんなことだろう。」

人間の命（の輝き）

- ・ 命のつながり
- ・ 元氣 健康
- ・ やさしさ
- ・ おだやかで満ち足りた
- ・ 美しさ

命の輝き

海の命（の輝き）

- ・ 二の場面の与吉いさの言葉